

---

# その姫の秘め事

麻由

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その姫の秘め事

### 【Nコード】

N6812D

### 【作者名】

麻由

### 【あらすじ】

みなしこの少女からお姫様に昇格なんて、私ってついてるかも。そう思ったのもつかの間。待っていたのは最高にツライ生活だった。

## プロローグ（前書き）

時代物ですが言葉はほとんど現代語です。ちぐはぐな感じを受けるかもしれませんが、どうぞお楽しみください。

## プロローグ

「おお……！この子が……まさに姫様にうりふたつだ」

ひげ面の男はさも嬉しそうに私を眺め回した。横の若い男はその部下だろうか。

「女、この子の家族は？」

「いいえ……この子は拾い子ですので、親兄弟はおりませぬ」

「ならば問題あるまい。連れて行くぞ」

「そんな、急に……」

「礼はたつぷりさせてもらう。おい」

「はっ」

「ま、まあ、こんなに……！」

おかみさんはふるしきのなかの金びかの小判に、さつと目の色を変えた。手渡されるとすぐにがっちり抱きしめた。絶対に独り占めするつもりだろう。

「異存はないな？」

「ええ、ええ！こんな小娘でよかつたら、いくらでもお連れになつて下さいな」

おかみさんはそう言いながらうつとりと小判をなでている。私のほうなんか見向きもしない。

別に悲しくなんかないけど。

「では失礼する。世話になったな。おい、この子を連れてゆけ」

「はっ」

## 第1話：城への招待状

私の売り渡しの交渉はほんのわずかで終わった。

みなしごの命なんて、その程度のもんなのだ。

こき使えるだけこき使われ、その後どっかに売り飛ばされるのが孤児の運命ってやつ。

けど私は、ここに来た時からずっとこの日を待っていた。

キツい肉体労働と大嫌いなおかみさんから解放される日を。

ここでの生活ときたら本当に散々だった。

朝から晩までこき使われ、茶碗一杯もないご飯に、薄っぺらのボロ布団。

水一滴さえもらえない日もあった。

この家から出て行けるならどこでもいい。たとえおかみさんの次に嫌いな侍のもとへだって。

ここよりはマシに違いないから。

「わははは！よくやったなお前たち、これでわしらへの褒美は確定だ」

ひげ面は足取り軽く先頭を歩き、私は下っ端の侍に取り囲まれるようにして外に出た。

横にはさっきの若い男がいる。さほど年は変わらない感じがする。

だからって親近感が湧いたりはしない。こいつも侍なんだから。表には城の旗を背負った馬が停められていて、その周りにはざわざわと巨大な人だかりができていた。

私が出て来るとどよめきがいつそう大きくなった。

「なんであんな娘が？」そう囁くのが聞こえた。にらみ付けると女たちは目を逸らして何くわぬ顔をした。

男は荷物を取ってこさせようとしたけど、私はいいいと言った。  
荷物になるようなものなんて持ってないから。

おかみさんは自分の着物やかんざしを貰うのにお金を使いまくるので、私たちにお金がまわってくることはなかったのだ。

この着物だって何年も着続けてるからすっかり小さくなってしまっている。

下っ端は哀れむような目で私を見たけど、男は

「そうか」

とだけ言った。

「その子はどうする？わしの馬に乗せるか」

ひげ面の上機嫌な声が飛んできた。

げっ、こんなオヤジと乗馬なんてまっぴら。

「いやっ！」

私が叫ぶと、ひげ面の顔がピキッと固まり、場の空気が凍り付いた。  
下っ端たちは寒くもないのにカタカタ震えている。

若い男だけが落ち着いていた。

「突然のことで気が動転しているのでしょう。馬が走りにくくなりますから、俺が乗せて行きます」

「おお…ゴホン。まあ、そうだな。そうしよう」

ひげ面は機嫌を取り直して、自分の馬にぴょんと飛び乗った。

いきなり小太りが自分の上に落っこちてきたので、馬はグヒツと苦しそうな声を出した。

「お前はこっちだ」

内心スカッとしているところを男に引っ張っていかれ、私はやや乱暴に馬に乗つけられた。

「あいたっ！」

鞍は信じられないほど丈夫だった。ジーンと痛むおしりに手をやる暇もなく、はあっ！という掛け声とともに馬は走り出した。

たくさんの馬が走る音が、ドドド…と地響きのように聞こえた。

「あまり世話を焼かせるな」

うしろにいる男が小声で言った。

「今のお前は売られた身だ。立場をわきまえろ」

「侍相手に立場もくそもないわ」

私は必死に鞍にしがみつきなから言った。そうじゃないとお尻が毟みみたいにポンポン跳ねてしまう。

「嫌いなのか？侍が」

私はふんと鼻を鳴らした。

「大っ嫌い」

男は嫌いと言われても気にしていないみたいだった。

「残念だったな。お前は今日から侍がわんさかいる所で暮らすんだ」

「わかつてる」

私はうめいた。

「で？私の仕事は何？汗くっさい服の洗濯？血まみれの刀ふき？」

「仕事はない」

「…は？」

「そうだな…あえて言うなら、暮らすことが仕事だな」

「どういうこと？」

「行けば分かる」

それ以上は教えてくれそうになかった。

まあいいや。どんな仕事だろうと、今までの暮らしのことを思えばつらいことなんてない。

今一番つらいのは、この揺さぶりに耐えることだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6812d/>

---

その姫の秘め事

2010年12月18日14時18分発行